

平成 29 年 8 月 1 日現在

機関番号：23601

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25463493

研究課題名(和文) きょうだいを亡くした子どもへのグリーフケアの早期介入プログラムに関する研究

研究課題名(英文) Study for early intervention of grief care for children who have lost their siblings

研究代表者

竹内 幸江 (TAKEUCHI, Sachie)

長野県看護大学・看護学部・准教授

研究者番号：00311902

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：きょうだいを亡くした子どもへのグリーフケアについて検討するために、きょうだいのある子どもを亡くした親、きょうだいを亡くした経験者、グリーフケアの実施者を対象に面接調査を行った。その結果、親のかかわり方がキーポイントとなること、子どもはきょうだいを亡くしたことを周囲に伝えにくいことが明らかとなった。そのため、親と一般の人を対象とし、きょうだいを亡くした子どもの理解とケアを目的としたリーフレットを作成した。そして、ワークショップなどを利用し、その内容について評価を実施した。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this investigation was to describe the grief care to children who have lost a sibling. Interview data were collected from parents who have lost a child with siblings, persons who have lost a sibling, and planner of grief work project by semi-structured interviews. It was described that parental attitude was important for grief care and that children could not convey facts to others. We created a leaflet with the aim of understanding and caring for children who lost their siblings. The content was evaluated by doing a workshop.

研究分野：医歯薬学

キーワード：小児看護 グリーフケア きょうだい

## 1. 研究開始当初の背景

悲嘆 (Grief) へのケアとしてグリーフケアが注目され、悲しみが癒されるプロセスであるグリーピングを視野に入れたケアを実践している施設も多くなってきている。小児看護の領域でも、特に子どもを亡くした両親に対するグリーフケアが必要とされ、施設あるいは当事者が主催する「親の会」などで、グリーフワークが行われていることが多い。子どもの死をめぐるグリーフケアとしては、このように家族の中でも両親の悲嘆に着目されることが多く、両親へのケアについて研究されることが多かった。

しかし、最近では亡くなった子どものきょうだいに関する研究も多くなり、きょうだいを亡くした子どもの体験や悲嘆過程などの報告もみられる。きょうだいの死別を体験した子どもはその時の体験を強烈に覚えており (竹内ら、2003)、中にはトラウマとして抱えている場合もある。突然の事故死や急性疾患など短い経過で迎える死は別として、例えば小児がんのように長期の闘病期間を経て亡くなった場合、その病気の発症時期から、きょう代いは家族から置き去りにされているような孤独感を抱くといわれる (小澤、2006)。また、病児のきょうだいの特性として、自分のことを考えるのが苦手で、自分のことを考えることに罪悪感が伴うという報告もある (有馬、2009)。この罪悪感 はきょうだいの闘病時期から抱いており、病児に気持ちが向きがちな両親に自分もみてほしいと思うこと自体を悪いこととしてとらえている (清田、2009)。そして、きょうだい が亡くなってからは、両親の関心が自分に向くことを嬉しいと感じてしまうこと、きょうだい が体験できないことを体験し、楽しいと感じてしまうことなどに罪悪感を抱いている。そんな自分を誰も認めてくれないことに苦しみ、孤独感と周囲への不信感を抱くようにもなる (新家、

2010)。これらから、きょうだいを亡くした子どもへの支援は、きょうだいの亡くなる前の闘病時期から必要であることがわかる。

このようなきょうだい を亡くした子どもの悲嘆過程においては、親のかかわり方が大きく影響する。死別後、両親からどのような支えを得ることができたかによって悲嘆過程は異なり、親からきょうだいについて話すことを拒否された子どもは、感情を表せないままの状態 で成長し、その後の両親との関係にも支障をきたしている (黒木ら、2006)。親も子どもを亡くした悲嘆過程にあり、自身の悲しみを処理するのに精一杯であること、子どもに死について語ることを避ける社会の傾向などから、親や家族と死別体験を共有することができないでいるのが現状と思われる。

## 2. 研究の目的

きょうだい を亡くした子どもの心のケアの必要性が説かれる中で、その子どもを対象としたグリーフワークが実施されることは少なく、支援体制は十分とはいえない。支援体制を整えるためには、具体的なグリーフワークの方法や適切な介入時期を明確にする必要がある。本研究では、きょうだい を亡くした子どもへのグリーフケアを、介入時期、子どもと親の援助ニーズ、支援体制に必要な要素を明らかにし、グリーフワークプログラムについて検討することを目的とする。

## 3. 研究の方法

### (1) 調査対象者

きょうだいのある子どもを亡くした親、ならびにきょうだい を亡くした経験者。

グリーフワークを実施している団体の代表者

### (2) 調査方法

子どもを亡くした親の会の代表者に対象と

なる親と経験者を紹介してもらい、研究の趣旨ならびに倫理的な配慮を説明し同意が得られた対象者に面接調査を実施した。グリーフワークを実施している団体の代表者にも同様に、研究の趣旨ならびに倫理的な配慮を説明し同意が得られた後、グリーフワークの内容、介入時期、介入方法、運営方法などについて面接調査を行った。

なお、調査に際しては所属大学の倫理審査を受け承認を得た（承認番号 2014-14）。

### (3) 分析方法

面接内容を逐語録に起こし、研究疑問にそって内容を分類し要約してまとめた。

## 4. 研究成果

### (1) 子どもを亡くした親の調査結果

調査協力が得られた親は、父親 1 名を含む 4 組 5 名であり、子どもが亡くなってから 8 ~ 16 年経過していた。

子どもを亡くしてから、親ときょうだい間であらためてお互いのその時の気持ち、今までの気持ち等について話したところある家族はいなかった。しかし、親は子どもがきょうだいの死をどのように受け止め、自分の中でその思いを消化してきたのかを気にかけており、知りたいと思っていた。特に、不慮の事態で、きょうだいの死を目の当たりにした子どもの場合は、その後の子どもの気になる言動を、その時の体験と結びつけて考える傾向にあり、子どもの成長・発達に対する影響は強いと感じていた。また、どの親も、子どもを亡くした当時は自分自身のことでも精一杯で、きょうだいのことを気にかける余裕もなかったと振り返っており、そのことを負い目を感じている親もいた。できれば、その時期に親以外の第三者が子どもの気持ちを聞いたり、サポートしてほしいとの要望も出された。そして、親が参加しない子どもだけのサポート

グループの方が、子どもも気持ちを表現しやすいのではないかと思っており、そのようなサポートグループができることも望んでいた。

これらの結果から、きょうだいを亡くした子どもへのグリーフケアの要素として、きょうだいの闘病中から心の準備ができるようにかかわること、亡くなった直後に子どもの話が聞ける存在が必要であること、親のいない場所できょうだい同士が話し合える場を設定することが示唆された。

### (2) きょうだいを亡くした経験者の調査結果

調査協力が得られた経験者は 2 名であった。1 名は 10 年前に兄を 5 歳の時に亡くしており、1 名は妹を 3 年前に 18 歳の時に亡くしていた。

どちらも出生時からの疾患できょうだいを亡くしており、在宅での闘病生活もみていた。二人とも祖父母がよく面倒を見てくれたこともあり、入院の付き添いなど母親がいなくて【さびしさを感じることはなかった】。また、きょうだいの病状については、親から説明を受けていたが【あまり覚えていない】とのことであった。それよりも間近にきょうだいの様子を見ることで、病気のことや予後のことを理解するようになっていた。どちらの母親も、亡くなった子どもの方に手がかり、きょうだいにあまり関心を向けられなかったことを気にしていたが、家ではよく面倒をみてくれたので、【普通の母親と同じ】と感じており、【母親を（きょうだいに）とられたという感じはなかった】と話していた。きょうだいが亡くなった後、1 名は家族ときょうだいについてあまり話さないとのことだったが、1 名はよく話すとのことであった。だが、【親と自分とは悲しみの感じ方が違う】ととらえていた。どちらも近親以外の周囲の人に、きょうだいのことをあまり話しておらず、信頼できる人には話す、それ以外は聞かれたら【なんとなく受け流す】と話していた。そし

て、話せないことを少し負い目にも感じていた。亡くなるまできょうだい辛い治療にも耐え、頑張っていたことを認めており、その姿をみて【自分も精神が強くなった】、亡くなった後も【辛いときには思い出して頑張ろうと思う】と、きょうだいの分まで頑張ろうという気持ちになっていた。1名は、きょうだいを亡くした子どもの集いに参加していたが、その時の様子をあまり覚えておらず、その場できょうだいのことを話した記憶がなかった。そのためか、そういう集いに対して積極的ではなく、そういう機会があっても参加しないだろうと答えていた。もう1名は、亡くなった後も看護師がきょうだいのことを覚えていて、一緒に話しをしてくれたことを嬉しいと感じていた。そして、きょうだいを亡くした人たちが集まることに関しては、興味があると答えていた。

これらの結果から、きょうだい亡くなる前から、親に病状について説明され、自身でも闘病の様子を見ていたことで、きょうだいの死もその時までの家族の対応も受け入れられたことがうかがえる。亡くなった後で、親がきょうだいを亡くした子どもに負い目を感じていても、親がそのように思うことで、すでに子どものことを気にかけていることでもあり、そのことできょうだいを亡くした子どもたちは、親に対して不満に思うことはなかった。きょうだいに亡くなる子どもの情報がきちんと伝えられていること、家族が協力して闘病生活を支えること、親がきょうだいを気にかけることが、きょうだいのグリーフケアにおいて重要な要素であることが示唆された。また、きょうだいを亡くした子どもが、そのことを周囲の人にどのように話すのが課題としてあげられた。

### (3) グリーフワークを実施している団体への調査結果

グリーフワークを実施している団体の代表者2名に、グリーフワークの内容、介入時期、介入方法、運営方法などについて面接調査を行った。その結果、子どもを亡くした親に対するグリーフケアが主な活動内容で、子どもへのケアはまだ十分に実施されていない現状が確認された。その中でも、実際に子どもへのケアにかかわっている方から、ケアの方法、留意点について聞き取りを行った。

介入方法は、子どもを亡くしたご家族の会と同時に子どもの集いを開催し、その場に参加した子どもたちに主に遊びを通してかかわり、感じ取った子どもたちの様子を両親に伝えていた。留意することでは、遊びを通しての関わりと子ども同士で遊ぶことを大切にしており、子どもは関係性ができると、見ず知らずでもその場で仲良くなった子どもに、亡くなったきょうだいが好きだった人形や家族の写真を見せるという行動がみられ、子ども同士が会うことや子ども同士だと口に出さなくてもわかってくれるということを察知でき、それが嬉しいと感じているととらえていた。

子どもたちの変化を親に伝えるようにしていたが、親も交えたグリーフワークをどのように進めていくのが課題であった。

### (4) パネル展の実施

予備調査として、子どもを亡くした家族を対象としたパネル展を自助グループの親の会と共同開催し、そこで討論された内容について分析を行った。パネル展では、東日本大震災で犠牲となった子どもの両親と、交通事故で子どもを亡くした母親をパネリストとして、理不尽な状況でわが子を亡くすこととなった親の痛みや苦しみについて話し合った。闘病生活を不得た亡くなった子どものきょうだいへのグリーフケアとして、闘病時期からの介入の必要性は示唆されているが、不慮の事故に

よってきょうだいを亡くした子どもへのグリーフケアのあり方については、両親に死を受け止める余裕がない分、どのように介入していくのが課題として見出された。

#### (5) グリーフワークの一環としてのリーフレットの作成

##### 作成の意図

調査結果より、グリーフケアの介入時期としては、きょうだい亡くなる以前からその子どもにかかわることが必要であることがわかった。しかし、医療者がそうしたきょうだいかかわる機会には実際に少なく、今回の研究でも、そのような対象者を得ることが難しかった。また、きょうだいを亡くした子どものケアについては、親のかかわり方がキーポイントとなること、きょうだいを亡くしたことを本人が周囲に伝えにくいことも明らかとなった。そのため、親だけでなく一般の人を対象に、まずはきょうだいを亡くした子どもの気持ちや行動について理解してもらうことを目的とした。

リーフレットの作成にあたっては、調査の結果ならびに、Szette Misrachi 氏の講演集や文献を参考に、【グリーフとは何か】【子どもにとっての死の理解】【きょうだいを亡くした子どもの反応】【きょうだいにどのようにかかわったらよいか】という内容で構成した。

この素案をもとに、「こどもが大切な人を亡くしたとき」というワークショップの中で講義を行った。その後、ワークショップの参加者 10 名にリーフレットを見てもらい、内容等について聞き取り調査を行った。また、看護系短大の学生にリーフレットを読んでもらい、感想などを自由に記述してもらった。

##### リーフレットに対する評価

ワークショップ参加者の背景は 20～60 歳代で、大学生、自助グループのボランティア、子どもを亡くした親などであった。調査の結

果、「子どものグリーフについてはあまり知らなかったが、大切にケアが必要だとわかった」「子どもと向き合う姿勢、共感することが大切だとわかった」「子どもなりの悲しみの向き合い方があるが、個々に対応していくことが必要であることがわかった」という意見が大半を占めた。また、「まだ知識として浸透していないことなので、このような情報提供は必要である」「もう少し内容を盛り込んだ方がよい」という意見もみられた。

短大生は 10～30 歳代の 29 名で、「とてもわかりやすい」10 名、「わかりやすい」17 名、「あまりわかりやすすくない」2 名であった。リーフレットとしては、「言葉が簡単で読みやすい」「子どもの視点で書かれていて良い」「具体的な内容でわかりやすい」という評価を得た。内容については、「きょうだいを亡くした子どもの反応がわかった」「きょうだいを亡くした子どものケアの必要性が理解できた」「自分の経験から、その状況の子どもにどのように接すれば良かったか考えさせられた」「子どもへの接し方がわかった」「小・中・高校生に知ってもらいたい内容だと思った」などの意見がみられた。そして、「さらに具体的にどうしていけばいいのかなど、内容が盛り込まれているといい」という意見もあった。

以上より、親や一般の人に対して「きょうだいを亡くした子どもへのケア」については、このリーフレットにより理解が得られると考えられる。リーフレットで得た知識を元に、子どもへの対応を個々に考えていくことが大切であり、その取っ掛かりにもなると思われる。今後は、その活用方法を含め、親と子どもが共に行うことができるグリーフワークについて検討することが課題である。

##### 引用文献

竹内幸江（研究代表者）他（2003）：子どもに対するデス・エデュケーションのためのプログラム開

発に関する研究.

平成 12 - 14 年度長野県看護大学特別研究費補助  
金研究成果報告書.

小澤美和(2006): グリーフケア医療者の立場から,  
小児看護, 29 (12): 1651-1656 .

有馬靖子 (2009): 病児のきょうだいの本音 . 小児  
看護, 32 (10), 1383-1386 .

清田悠代(2009): 「きょうだい」が「きょうだい」  
の傍らにいて見えてきたもの . 小児看護, 32(10),  
1379-1382 .

新家一輝: 小児緩和ケアにおけるきょうだい支援 .  
小児看護, 33 (11), 1546-4551 .

黒木真奈美, 津田茂子 (2006): きょうだいとの死  
別を経験した青年期同胞の悲嘆過程 . 小児看護,  
29 (4), 523-528 .

Suzetta Misrachi (2012): Sibling Grief  
Summary[Matsumoto] .

## 5 . 主な発表論文等

〔学会発表〕(計1件)

山下恵子、きょうだいを亡くした子どもへの  
関わりと子どもの想い、第39回日本死の臨床  
研究会年次大会、2015.10.12、岐阜市

## 6 . 研究組織

### (1) 研究代表者

竹内 幸江 (TAKEUCHI, Sachie)

長野県看護大学・看護学部・准教授

研究者番号: 00311902

### (2) 研究分担者

山下 恵子 (YAMASHITA, Keiko)

松本短期大学・看護学科・准教授

研究者番号: 70442168

内田 雅代 (UCHIDA, Masayo)

長野県看護大学・看護学部・教授

研究者番号: 70125938

白井 史 (SHIRAI, Fumi)

長野県看護大学・看護学部・助教

研究者番号: 30420699

高橋 百合子 (TAKAHASHI, Yuriko)

長野県看護大学・看護学部・助教

研究者番号: 00438178

太田 克矢 (OTA, Katsuya)

長野県看護大学・看護学部・教授

研究者番号: 60295798